

## 令和3年度 学校経営計画及び学校評価

## 1 めざす学校像

しっかりと生徒と向き合い、信頼に基づいた教育活動を展開することで、生徒の「意欲」を育て「力」をつける学校をめざす。

- 互いに信頼で結ばれた関係を作り上げ、その中で豊かな人間性が育成される学校をめざす。
- 学力はもとより人間関係形成能力等も含めた総合的な「人間力」をつけることのできる学校をめざす。
- 専門コース設置校の特色を生かして生徒の学習意欲を引き出し、多様な進路をサポートできる教育活動を継続していく。

## 2 中期的目標

## 1 進路実現をはかる学力の育成

- 学校経営推進事業の令和2年度の支援校に認定されたことを受け「心を鍛えるつばさチャレンジ」として創意工夫の授業改革に取り組む。
  - タブレット等を整備し、「わかる授業」「魅力ある授業」を創出する。
  - 相互の授業見学や研究授業、授業改善の研修を通じて積極的に授業改善を図る。  
※学校教育自己診断「授業はわかりやすい」の項目の肯定率を65%とし、R5年度には70%以上にする。(H30年度56% R1年度64% R2年度69%)
- 「確かな学力」の定着から進路実現できる学力の育成をはかる。
  - 学力生活実態調査を年2回実施し、学力の定着度を測定するとともに、学力向上プラン策定の資料とする。
  - 生徒の学力の分析を行い、生徒が進路へ積極的に取り組むモチベーションを高めるためにデータに基づいた取り組みをおこなう。  
※平成29年度から導入した学力生活実態調査のA・Bゾーンの生徒数を、R5年度まで20人以上維持。  
※進路先に対する満足度アンケートをおこない、毎年肯定的回答90%以上を維持する。  
※中堅私大の合格者をR3年度は3人、R5年度までに10人以上にし維持する。(H30年度11人 R1年度2人 R2年度1人)
- 多様な進路ニーズに応えるため専門コースや総合系の授業を充実させる。
  - 高大連携により大学での学びの先行実施を行い、人文ステップアップコースの進学に対する生徒のモチベーションアップを図る。
  - 専門コース(社会文化コミュニケーションコースや美術工芸表現コース)の特色を生かした取り組みを行う。

## 2 豊かな人間性と社会で生き抜く力の育成

- 学校経営推進事業の令和2年度の支援校に認定されたことを受け「心を鍛えるつばさチャレンジ」としてコミュニケーション力のある人材を育成する。
  - 教育相談体制の再構築とカウンセリングの手法を用いた対話主体の生徒支援をおこなう。
  - 開発的カウンセリングの視点をもって、学校経営推進事業で整備した箱庭を活用して生徒の自己肯定感の育成をすすめる。
  - ユニバーサルデザインの授業等でのプレゼンテーション活動を通して生徒の自己発信力を高める。  
※学校教育自己診断のアンケート(教員)「教育相談体制が整備」の肯定率をR5年度まで75%以上を維持する。(H30年度68% R1年度59% R2年度79%)
- 規範意識と帰属意識を育成する。
  - よりよく社会で生きるために必要な力の育成として、教員全体が協力して一人ひとりを大切に丁寧な生徒指導をめざす。
  - 学校が安心できる居場所づくりとなるようにSNS等の適切な使い方を教えるとともに複数回の面談を通して学校生活への定着をすすめる。  
※生徒向け学校教育自己診断の「学校へ行くのが楽しい」の項目の肯定率をR3年度80%にし、R5年度には85%以上をめざす。(H30年度67% R1年度77% R2年度78%)  
※学校教育自己診断(生徒)「悩みや相談に親身にに応じてくれる」をR5年度までに75%以上をめざす。(H30年度63% R1年度67% R2年度70%)  
※担任、進路指導担当による生徒面談複数回実施(100%)
- 部活動の活性化を図る。
  - 継続的な入部促進と退部率の抑制により、帰属意識を高める。
  - 地域との交流を通して自己有用感の向上を促す。  
※部活動の加入率をR5年度まで60%をめざし、退部率前年度比5%未満を維持する。(加入率 H30年度67% R1年度57% R2年度55%)
- ユネスコスクールの活動を基盤に、社会参画意識の育成を図る。
  - 社会貢献活動をとらえて自尊感情・自己有用感の向上を図る。
  - 地元小中学校や地域社会と連携し、地域活動や異校種との交流を通じて社会に貢献する活動を推進する。  
※小学校、中学校や地域の行事、学習活動等に参加する機会の設定(年間2回)
- 共生推進教室の取り組みを生かし、生徒のコミュニケーション能力等の育成を図る。
  - 「ともに学びともに育つ」の理念のもと、共生推進教室の生徒が他の生徒や地域の人々と交流する機会をより多く設定する。  
※R5年度まで、共生推進の生徒の進路決定率100%を維持する。

## 3 校内組織の改革と後継者の育成。

- チーム学校として機能する体制整備
  - 大職員室でのコミュニケーションを活性化する。
  - 分掌再編にあたり、業務の見直しを図る。
  - 全教職員が各コースに所属し後継者を育成することで、コース授業の改善とともに継続と定着を図る。
- 人材育成と意識改革
  - ミドルリーダーを中心に、経験年数の少ない教員のOJTを図るなど、チームとして機能する職場づくりを推進する。
  - 教職員一人ひとりの意識改革を図り、勤務時間の管理や健康管理を徹底し「働き方改革」に取り組む。

## 【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析 [令和3年12月実施分]	学校運営協議会からの意見
<p>全体的に前年度から改善点が増加。授業について、生徒からは「教え方に工夫している先生が多い」84%(+9p)「視聴覚機器やPCを使う機会がよくある」88%(+8p)教員からは「PC等のICT機器が、授業などで活用されている」98%(+2p)「教員の間で、授業方法等について検討する機会を積極的に持っている」80%(+28p)など改善が見られた。一方で「家庭学習が習慣となった」(生徒)42%(-4p)など学習習慣の定着には至っていない。安心な学校づくりとして生徒からは「先生は生徒のプライバシーなどを守ってくれる」86%(+5p)「学校に行くのが楽しい」80%(+2p)「悩みや相談に親身になって応じてくれる先生が多い」80%(+10p)など、生徒の自己肯定感の向上の取り組みを生徒自身が感じるようになった。保護者からは「学校はいじめや暴力のない学校づくりに取り組んでいる」90%(+4p)「学校の学習指導の方針に共感できる」88%(+7p)一方で「PTA活動に参加できる機会がある」65%と低い数値であるので、コロナ禍でも参加しやすい活動形態を検討したい。</p>	<p>【第1回7月2日(金)】令和3年度の学校経営計画についての説明をうけて、遅刻指導やSNS指導についての具体例についての質疑応答。以前と比べて北摂つばさ高校は大変良くなっている。生徒の行動に対する一定の歯止めとして身だしなみ指導は必要である。地域から大いに期待されている。生徒指導は人格を否定せずなぜ必要なのかを伝えてほしい。つばさブランドに誇りを持ってほしい。</p> <p>【第2回11月1日(月)】授業力向上をめざした授業見学に関して意見交換を実施。中学生への指導の参考となった。PCの使用で授業の効率化が図られていた。PCを使用することでプリントを配付する必要がないし、プリント整理が苦手な生徒にとっても良い。実験を中心に実施したり、日常と数学の結びつきを考えることで数学を楽しめている。先生と生徒の関係もよかった。各分掌、学年がポジティブに取り組んでいる。防災を他人事でなく生徒に意識させることが大切。生徒にはリスクを知りながらPCを使いこなしてほしい。</p> <p>【第3回2月9日(水)】コロナ禍による実験や実習、校外活動などの影響を考慮してリモートの継続的な活用を今後とも願う。教育現場としてPDCAサイクルの定着とともに効果的な方法を今後とも追求してほしい。</p>

## 府立北摂つばさ高等学校

## 3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標[R2年度値]	自己評価
進路実現をはかる学力の育成	(1)「わかる授業」をめざし創意工夫の授業改革に取り組む ア「学びを自信に」つなげる授業改革 イ 校種を超えた授業公開・研究授業	(1) ア・コース授業改善委員会を核に新学習指導要領の主旨を踏まえ、「わかる」から「自ら考える」ことで「学びを自信に」つなげる授業改善に向けた研修。 イ・小中学校の公開授業や研究授業を複数教科で開催。	(1) ア・学校教育自己診断(生徒)「授業は分かりやすい。」肯定率65%以上を維持。[69%] イ・異校種連携で研究協議1回以上設定。[1回]	(1) ア・学校教育自己診断(生徒)「授業はわかりやすい」肯定率76%(+7p)「教え方に工夫している先生が多い」84%(+9p)「視聴覚機器やPCを使う機会がよくある」88%(+8p)等、昨年度大幅に上昇した設問の回答が今年度も上昇している。視聴覚機器やPC等を授業で利活用している教員が全体の58%となった。今後も1人1台端末を使用しての授業改革に継続的に取り組んでいきたい。(◎) イ・地元5中学の進路担当者、支援教育担当者との情報交換会は2回実施できた。また、専門コースの授業公開を行い、研究協議を1回実施した。(○)
	(2)「確かな学力」の定着から進路実現できる学力の育成を図る ア 学力生活実態調査の導入実施 イ 生徒が進路実現へ積極的に取り組むモチベーションを高める取組み	(2) ア・学力生活実態調査(4月と10月実施)をツールにして学力定着度を測定・分析。進路目標実現に向けキャリアパスポート等で具体的な支援を実施。 イ・学習支援クラウドサービス等の活用により家庭学習の定着を支援。 ・長期休業中には「勉強マラソン」を行い、主体的学びへつながる自学自習の習慣を習得させる。 ・1年次進学準備クラス、2年次以降人文ステップアップコースにより進学希望の生徒のモチベーションアップを図る。 ・図書室の継続的な開室をめざし、読書活動の活性化を図る。	(2) ア・学力生活実態調査の上位者(A・B1ゾーン)20人[16人]進路実現に対する満足度の肯定率90%維持。[94%] イ・学習支援クラウドサービスの活用により学校教育自己診断(生徒)「家庭学習が習慣となった。」肯定率50%。[46%]「勉強方法が身についた。」肯定率50%をめぐす。[-] ・中堅私大の合格者3人以上をめぐす。[1人]看護医療系合格者10人以上を維持。[17人] ・週に2回昼休みの図書館の開館をめざす。[-]	(2) ア・学力生活実態調査の上位者A・B1ゾーンの生徒数26名。(○)進路別満足度アンケートでの肯定的回答93%。(○)学校教育自己診断(保護者)「学校の学習指導方針に共感できる」88%(+7p)イ・学習支援クラウドサービスを活用したオンライン学習等での反転授業を見据えて本校性の実態把握するために設定した「家庭学習が習慣となった」42%(-4p)については、同サービスを活用してすでに教員から生徒へ課題を指示したり、生徒から教員へ課題を提出するなどの家庭学習を指示している。ただ生徒はノートでの課題を家庭学習と捉えていたようなので、今後は同サービスの活用をさらに進めてPCを用いた家庭学習を定着させていきたい。[△]「勉強方法が身についた」は、自主的に自学自習できる生徒を育成するために設置した項目である。今年度も「勉強マラソン」は感染状況の悪化のため中止せざるを得なかったため評価なし。(一) ・中堅私大の合格者8人。看護医療系合格者21人。(◎) ・図書館の定期的な開館は実施できた。蔵書のコンピュータ登録も順調に進み、次年度の常時開館と蔵書貸し出しに一定のめどが立った。(○)
	(3)多様な進路ニーズに応えるため専門コースや総合系の授業を充実させる ア 高大連携の活用で相互意識の向上 イ 専門コースの内容のランクアップ	(3) ア 大阪成蹊大学、龍谷大学との高大連携等を活用した高大接続に繋がる大学等での学びの先行実施。 イ 社会文化コミュニケーションコースでのフィールドワークの実施。異校種や地域の連携先と交流活動、防災教育等の実施。 美術工芸表現コース国公立、嵯峨美術大学、大阪芸術大学、京都芸術大学等中堅美大の合格にむけ、制作スキルの向上と展示運営のスキルの習得。	(3) ア・参加生徒へのアンケートで満足度60%以上。[91%] イ・社会文化コミュニケーションコースのフィールドワークの参加者へのアンケートで満足度60%以上。[92%] 美術工芸表現コースはアンケートにより制作の発表における満足度60%以上。[3年71%,2年95%]	(3) ア・高大連携の参加者への満足度アンケートで肯定的回答91.7%。(◎)人文ステップアップコースについては立命館大学と「構造方策プロジェクト」の連携授業を実施できた。(○) イ・社会文化コミュニケーションコースのフィールドワーク、出前授業の参加者への満足度アンケートで肯定的回答95.8% (◎) ・美術工芸表現コースの制作・発表に関する満足度アンケートの肯定的回答2年92%、3年100% (◎)
豊かな人間性と社会で生き抜く力の育成	(1) 学校経営推進費支援校として「心を鍛えるつばさチャレンジ」の取組みにより社会に通用するコミュニケーション力のある人材を育成 ア 教育相談体制の再構築 イ コミュニケーション力育成 ウ 自己発信力向上	(1) ア 教育相談体制の再構築とカウンセリング的な手法を用いた、対話を中心とした生徒対応ができるように教職員の意識と行動の変容を促す。 イ 開発的カウンセリングの視点からの生徒の自己肯定感を育成するためにSC、SSW および地域と連携した諸活動を通して双方向のコミュニケーション力の育成を図る。 ウ エンパワメント等授業等で生徒がプレゼンテーション等の体験活動を通して自己発信力の向上をめざす。	(1) ア・学校教育自己診断(教員)で「教育相談体制が整備」の肯定率75%以上を維持。[78%] イ・同(生徒)「学校に行くのが楽しい。」肯定的回答80%をめぐす。[78%] ウ・同(生徒)「授業を通して自信がついた。」肯定的回答60%をめぐす。[57%]	(1) ア・令和2年度教育庁の学校経営推進計画の支援校に選ばれ、開発的カウンセリングを中心とした生徒の自己肯定感の向上をめざした取り組み「心を鍛えるつばさチャレンジ」も2年めを迎えた。 学校教育自己診断(教員)で「教育相談体制が整備」の肯定率73%で75%を維持できなかったが、同(教員)「この学校ではカウンセリングマインドを取り入れた生徒指導を行っている」78%(+9p)、同(教員)「教職員は生徒の意見をよく聞いている」83%(+12p)同(生徒)「先生は生徒の意見を聞いてくれる」83%(+8p)など、体制作りから日常の生徒との実践で生かされる局面に移ったと考えている。(◎) イ・学校教育自己診断(生徒)「学校に行くのが楽しい」80%(+2p)生徒の自己肯定感を向上させることを目標に相談活動に取り組んだ。SC、SSWとといった心理面と福祉面での専門家に指導助言いただくだけでなく、専門家派遣事業も複数回活用して生徒支援につながることができた。(◎) ウ・同(生徒)「授業を通して自信がついた」64%(+7p)(○)生徒の自己発信力を高めるためにプレゼンテーション能力の向上を図った。
	(2)規範意識と帰属意識の育成 ア 生活指導の充実 イ 相談体制の充実による安心できる居場所づくり	(2) ア 遅刻多数の生徒に対し、5回ごとに改善指導を行い生活習慣の確立を促し遅刻者数の減少をめざす。 イ 安心して学校生活を送るためSNS等の適切な使い方を学び良好な人間関係を構築できるようにするとともに、きめ細かな面談の実施(2回以上/年間)。	(2) ア・遅刻者数を前年度比で5%減少[3397]、欠席者数は前年度同程度を維持する。[2967] イ・学校教育自己診断(生徒)で「悩みや相談に親身に応じてくれる先生が多い。」72%をめぐす。[70%] 同(生徒)「先生はプライバシーや知られたくない秘密を守ってくれる。」80%維持。[81%] ・SNS関係のLHRの実施[2回/年] ・担任と進路指導部による生徒面談の実施[2回/年]	(2) ア・昨年度より遅刻者数が4255人で+1.25P、欠席者数は4342人で+1.46pとなった。今年度はコロナ禍での不安な生徒への心のケアのため傾聴を重視し、関係性を大切にできた。次年度そのうえで規則正しい生活習慣を確立するよう生活面での指導に力を入れていきたい。(△)学校教育自己診断(保護者)「学校の生徒指導の方針には共感できる」84%(+8p)同(生徒)「学校生活についての先生の指導には納得できる」70%(+9p)イ・学校教育自己診断(生徒)「悩みや相談に親身に応じてくれる先生が多い」80%(+10p)同(生徒)「先生はプライバシーや知られたくない秘密を守ってくれる」86%(+5p)(◎) ・SNS関係のLHRは年2回終了。(○) ・担任と進路指導部による生徒面談は年2回終了。(○)

## 府立北摂つばさ高等学校

豊かな人間性と社会で生き抜く力の育成	<p>(3)部活動の活性化 ア 部活動を通じた自己有用感の向上</p> <p>(4)社会への参画意識の育成</p> <p>(5)共生推進教室の取り組み</p>	<p>(3) ア 継続的な生徒の入部促進と多様な場面での活動を促す。帰属意識を高め自己有用感の向上を図る。</p> <p>(4) ア 地元小中学校や地域社会と連携し、社会に貢献する活動を推進する。</p> <p>(5) ア 共生推進生徒と普通科の生徒との協働活動の場面を行事などにおいて設定する。 イ とりかい高等支援学校と連携して実習先、進路先を確保。就労への丁寧な意識づけと支援をおこなう。</p>	<p>(3) ア・1年生の部活動の入部率 60%をめざし、年度内の退部率を5%以内とする。[入部率 57%、退部率 2%]</p> <p>(4) ア・小中学校、地域自治会との連携の機会を年1回設定する。[-]</p> <p>(5) ア・共生推進教室設置校対象のアンケート等で第3学年の生徒の協働活動満足度 60%。[-] イ・3年生全員の進路実現 100%</p>	<p>(3) ア・部活動の入部率は年度当初が 51%で、活性化の取り組みにより 54%まで上昇。年度内退部率は0%で居場所としてのクラブへの定着が進んだ。入部率促進のため、生徒会執行部と部活代表者会議との共催で部活動集会や入部勧誘放送、ポスター掲示、HP 上で定期的な部活動情報の発信など、継続的な取り組みが数値として表れてきている。(○)</p> <p>(4) ア・小学校との連携は、かやの東小学校では被災地支援について、玉島小学校では SNS の安全講習についてそれぞれ本校の生徒が講師となって交流を深めた。地域との連携は地域の清掃活動「クリーン作戦」に参加するほか独自に清掃活動も行った。(○)</p> <p>(5) ア・共生推進教室設置校対象のアンケート等で第3学年の生徒の協働活動満足度については 集計待ち。(一) イ・3年生全員の進路実現 100%達成。うち1名は障がい者枠ではなく、一般就労枠にチャレンジして内定を得た。(○)</p>
校内組織の改革と後継者の育成	<p>(1)チーム学校として機能する体制整備 ア教職員同士の活発なコミュニケーションの機会を設定する。 イ分掌再編による業務内容の精選 ウ専門コースの充実</p> <p>(2)人材育成と意識改革 ア 教員の育成 イ 教員の意識改革による「働き方改革」の推進</p>	<p>(1) ア大職員室に移行し全学年での日常的なコミュニケーションを活性化する。 イ分掌再編に伴い行事の工夫改善を図る。 ウ全教職員が各コースに所属し、後継者を育成することでコース授業の改善とともに継続と定着を図る。</p> <p>(2) ア ミドルリーダーを中心に経験年数の少ない教員の育成にチームとして取り組む イ 「府立学校における働き方改革に係る取組みについて」に沿って教員の意識改革を図り、勤務時間の管理、健康管理の徹底に努める。</p>	<p>(1) ア・「学校教育自己診断(教員)相談し合える職場の人間関係ができています。」55%をめざす。[52%] イ同(教員)「学校行事の工夫改善を行っている。」肯定的回答 70%維持。[79%] ウ・各専門コースで教材の共有を図る。</p> <p>(2) ア・経験年数の少ない教員への授業見学週間等の設置。[2回/年] イ・時間外勤務の抑制と昨年度比5%縮減、および一斉退勤日の設定と遵守。[月1回]</p>	<p>(1) ア・学校教育自己診断(教員)「相談し合える職場の人間関係ができています。」64%(+12p)(◎) イ・同(教員)「学校行事の工夫改善を行っている。」83%(+4p)(◎) ウ・同(教員)「学校の教育活動について、教職員で日常的に話し合っている」86%(+9p)「各教科において、教材の精選・工夫を行っている」90%(+9p)専門コースでの教材の共有により継続性と授業改善が図られた。(◎)</p> <p>(2) ア・学校教育自己診断(教員)「学校内で他の教員の授業を見学する機会がある」98%(+2p)同(教員)「教員の間で、授業方法について検討する機会を積極的に持っている」80%(+28p)授業見学週間等年2回終了。(◎) イ・時間外勤務の昨年度比5%縮減については2月段階で4.2%縮減に止まっているが、大部分の教職員の意識の変化により適切に退勤時間をコントロールする教職員が増加した。また、毎週火曜日のノークラブデーと関連付けて一斉退勤日の設定を11月から19時退勤を隔週水曜日とした結果、退勤時間を意識してのスケジュール管理を意識する教職員が増えた。[△]</p>